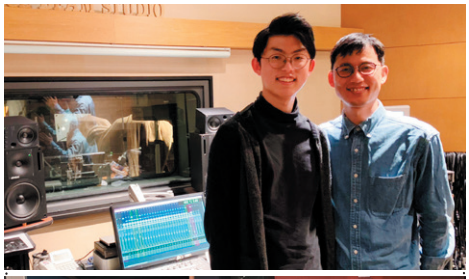
若人の守りとなる音楽を目指して

――2023ユースミュージックアルバム『I Can Do All Things ―キリストと共に―』日本語版が完成――

「若い女性やユースの活動でいつも流れています！」「いい曲がたくさんあるので（リリースが）毎年楽しみ！」「曲がおしゃれ」「分かりやすい言葉で福音のメッセージを伝えてくれるから，高揚感がすごい」……

多彩なサウンドと若者の心情に寄り添った歌詞で年々認知度を高め，多くの青少年やYSA世代から好評を博している「ユースミュージック」。このたび2023年のアルバム日本語版が完成し，1月末より公開されている。

アルバムの制作コンセプトである今年のユーステーマは「I Can Do All Things Through Christ ―キリストと共に―」テーマ聖句はピリピ4章13節「わたしを強くして下さるかたによって，何事でもすることができる。」―― 今年もオーディションによって選ばれた若い兄弟姉妹たちの歌声が，同世代の若者たちへの愛と励ましに満ちた主のメッセージを届ける。



進化するユースソングアルバム

「今年のアルバムは一味違います！」――5年前からユースミュージック日本語版の音楽監督を務める田代志帆（たしろしほ）姉妹は声を弾ませる。この数年楽曲の作詞作曲はすべて末日聖徒の音楽家として知られるニック・デイ兄弟によるものだったが，今回はデイ兄弟に加えて新たに3名の作詞作曲者が楽曲を提供している。「新しく参加された方々の曲は3曲ほどあるのですが，よりトレンドを意識した曲になっています」と田代姉妹。「たとえばベン・オルセン兄弟が手がけた『Faith』という曲はこれまでにないリズムの取り方がとても新鮮です。ニック兄弟が築いてこられたユースミュージックの世界観が，彼らによってさらに広がり，進化していることを皆さんにも感じていただけると思います。」

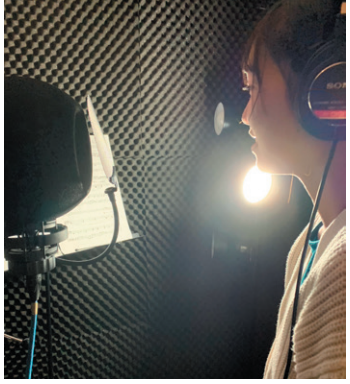
アルバム曲のシンガーを選考するオーディション参加者も年々増加し，今回は40名超の応募があった。特にここ数年はユース世代からの応募数の伸びが顕著で，今年のテーマ曲のシンガーを務めるのは高校1年生の姉妹。田代姉妹は言う。「これまではYSA世代の兄弟姉妹が歌うことがほとんどだったので，大人っぽい仕上がりになることが多かったテーマ曲ですが，今回は彼女のさわやかな歌声で，より若い青少年世代を想起させる楽曲になっています。」

「歌詞の力」を信じて

テーマ曲の日本語版作成にあたって，田代姉妹が最も心を砕いたのはサビ※1の歌詞作成である。ユースミュージック日本語版の歌詞は，教会翻訳課と田代姉妹の共同作業で作られている。分かりやすくかつ御霊を感じられる日本語を選び，原曲の英語歌詞のイメージを意識しながらメロディラインに当てはめていく作業は神経を使う。

例年のテーマ曲では，サビで同じ言葉を何度も繰り返すことはほとんどなかったが，今回英語のサビには「I can do all things」（わたしは何でもできる）という言葉が4回出てくる。どのように扱うべきか田代姉妹は頭を悩ませた。「4回のフレーズは音程もほぼ同じ形で，この言葉を何より強調したいニック兄弟の意図が感じられます。英語だとその繰り返しは

※1―楽曲のいちばん印象に残るフレーズ，盛り上がりの部分をいう。しばしばリフレイン（繰り返し）を伴う



映えるけれど，そのまま同じ言葉を日本語で4回繰り返すことがベストなのかは分かりませんでした。」

歌詞を作成する際，田代姉妹は一文字までこだわる。「終わり方や助詞の一文字だけでも曲の印象を左右するので……例えば『あなたに』と『あなたへ』なら，前の歌詞との繋がりを考えながら，どちらの方がより聴きやすく自分のこととして捉えやすい歌詞になるのか？ いつも考えています。」若者の心に届く歌詞を求めて，日本語を4回繰り返すものや英語と日本語をミックスしたものなどさまざまなパターンの歌詞を作り，関係者の反応を見て試行錯誤を繰り返した。

このサビの歌詞「I can do all things」については最終的に，2回を英語，2回を日本語にすることで落ち着く。「2回目のI can do all thingsについては『大丈夫』としました。英語と日本語をミックスすることで，主がそばにいるから大丈夫という安心感がプラスして伝わるのではないかと思ったので。」

田代姉妹がこだわりぬいたテーマ曲の日本語歌詞は，製作段階から携わった人々の心を捉える。シンガーを務めた姉妹は「歌詞がすごくいい」という。「『主と共にいればきっと乗り越えられるよ！』って励ましてくれる感じが満載で，『そっか，じゃあ頑張ろうかな』と思わせてくれます。」テーマ曲のレコーディングを行ったスタジオのエンジニアは楽曲に感銘を受け，田代姉妹に感動を伝えた。「作業が終わった後，エンジニアさんが実は自分もクリスチャンなんですよって教えてくださって，『今日の歌詞と歌声を聴いて心にじーんときました』と……。このことがきっかけで，別の曲のレコーディングでお世話になった際にはイエス・キリストを信じる喜びについて互いに語り合うこともできました。」

若人の守りとなる楽曲

昨年秋に発表された指針『青少年の強さのために』において，大管長会は若人に向けて以下のようなメッセージを送っている。「時には，自分は強くない，能力がないと感じることもあるでしょう。それはごく普通のことです。そのようなときは特に，救い主に頼ってください。主こそ，『青少年の強さ』なのです。」（指針『青少年の強さのために』大管長会メッセージより抜粋）

今年のユーステーマにリンクするこの言葉と同じ思いを，田代姉妹や参加したシンガーも抱いている。収録曲『How is it done』を担当した新谷（しんたに） 明（あきら） 兄弟はステークの若い男性会長会に召されたことがきっかけでオーディションに応募した。「青少年のために何か形に残せるものがないかと考えました。わたしが歌った曲にもテーマ曲と同じように，人生において困難なこと辛いことがあっても主に頼れば必ず主が助けてくださるということ，主はわたしたち一人一人を愛しておられるというメッセージが込められているので，ぜひ若い世代に聴いてほしいです。」

田代姉妹は，毎年新たな楽曲が若人のためにリリースされることについて，ミューチャルテーマが変わるという以上の理由があると考えている。

「一般の音楽チャートが毎年変わっていくように，若い子たちのニーズもどんどん変わっていきます。変化のスピードの速い世間の波にもまれている彼らに，毎年，身近な教会の音楽として選んでもらえるように。それによって賛美歌とはまたちょっと違った音楽で御霊により主の愛を感じたり，力をもらい証を得たりすることに繋がることを期待されているのではないかと思います。若い世代が日常的にユースミュージックを聴くことで誘惑から守られ，何かを判断するときに『あの曲でこんなふうに言っていたな』と思い出すことに繋がったらとても嬉しいです。」

＊＊＊

2023年ユースミュージックアルバム『I Can Do All Things ―キリストと共に―』日本語版は現在，YouTubeにて公開中。アルバムには10人のシンガーが歌う11曲が収録されている。YouTubeプレイリスト※2の説明欄に，MP3と楽譜をダウンロードできるサイトへのリンクがある。テーマ曲に加え，ほかの数曲についてもミュージックビデオが公開される。また近日中に，Apple MusicとSpotify※3で日本語版ユースミュージック2023を公開する。2017年以降に制作された6アルバムの楽曲も順次追加される。◆

専任宣教師

●上から氏名，任地（伝道地），出身ユニット，MTC入所日／着任日

＊掲載は自己申告制です。宣教師の方は着任の前後に写真と情報を伝道部所定のウェブフォームまたはメールでお送りください。

電子メール：

JPNLiahona@churchofjesuschrist.org

齋藤（さいとう） 詩音（しおん）
神戸伝道部
東京西ステーク
国立ワード
2022年6月12日
プロボMTC入所

金子（かねこ） 咲（さき）
カリフォルニア州サンノゼ伝道部
鹿児島地方部
鹿児島支部
2023年2月6日
プロボMTC入所

※2―ユースミュージック2023アルバム
YouTubeプレイリストのご視聴はこちら
https://bit.ly/3I4vgdo

※3―日本における顧客推薦度1位と2位の音楽配信サービス（2023年2月調べ）

I Can Do All Things――キリストと共に

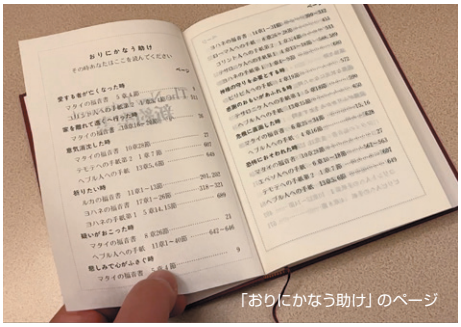
左から，和田少年の最初の宣教師
フレッド・アラン長老と姉妹
和田少年を教えた宣教師
ダグラス・ガンソン長老と姉妹
母親の和田計子姉妹
和田貴志長老ご夫妻
長野市の和田長老の実家前にて

クリスチャンに開かれる人生の可能性

――わたしを強くして下さるかたによって，何事でもすることができる※1――和田貴志（わだたかし）長老　七十人　アジア北地域会長

ある少年が，1965年に長野県長野市に生まれた。長野市のランドマークである善光寺から徒歩圏に家があり，濃厚な仏教文化の中で幼少期を過ごす。そして1977年，中学1年生のとき。通っていた公立中学校でギデオンバイブルという，赤みがかった表紙の小さな新約聖書が配られた。「それを使って，英語でも勉強してみなさい」と先生は言う。副読本だったのだろう。英語と日本語が併記された聖書で，最初の扉をめくると「おりにかなう助け」というページがあった。

1969年の和田少年，両親，妹とともに



「おりにかなう助け」のページ

目が覚めるような言葉

ページ冒頭には，「その時あなたはここを読んでください」と記されており，その時々に自分に必要な言葉，心に響く聖書の言葉が紹介されている。「たとえば，孤独なとき，試練に遭ったとき，悲しい気持ちで心が塞ぐとき，友達に裏切られたときとか，遠くに出かけるときとか……いろいろな感情のあるときに，合う言葉がたくさんあるんですよね。」中でも，特に感動したのは，「すべて重荷を負うて苦労している者は，わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」※2の一節だ。こんなことを言えるって，どんなすばらしい方なんだろうと思った。読み進めると，「互（たがい）に愛し合いなさい」※3「もし，だれかがあなたの右の頬を打つなら，ほかの頬をも向けてやりなさい」※4などの言葉が，時に心を刺すようになっていく。「ああ，これは目が覚めるような言葉だなあ。イエス・キリストってすばらしい御方だな，という感情があって」イエス・キリストを信じる気持ちが芽生える。

この少年が，今日のアジア北地域会長，七十人の和田貴志長老である。まだ福音と巡り合ってはいない。

海外へのまなざし

仏教都市・長野にも，欧米から留学生が来ていた。和田少年は，中学校に来ていた留学生を見かけると，初歩の英語で積極的に話しかけ，「下手な英語でもコミュニケーション取ったら，取れるじゃないか！」という経験を何回かする。「性格上，誰とでも話すので。あんまり尻込みしないで，怖い者知らずで話す。そうすると，そこで新しい友情が生まれる。そうしたら新しい発見がある，ということの繰り返しをやっていくうちに，ああ，これっていいなあと。」中学生にして海外留学を志す思いが湧いてきた。

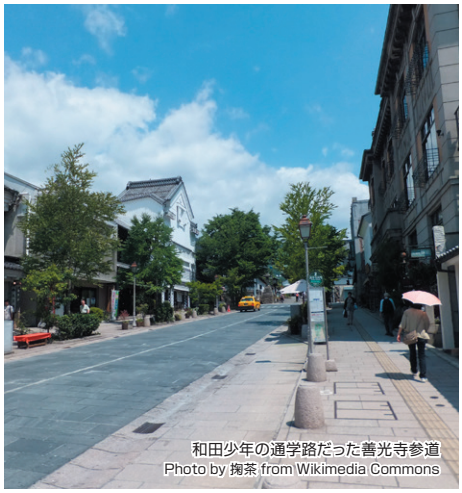
そして高校1年生の11月20日，雪の舞う寒い日のこと。和田少年は学校からの

※1―2023年のユーステーマ聖句（ピリピ4：13）
※2―マタイによる福音書11：28
※3―ヨハネによる福音書13：34
※4―マタイによる福音書5：39

I Can Do All Things
――キリストと共に

善光寺山門前

1980年12月，初めて長野支部のクリスマス会を訪れた和田少年


和田少年の通学路だった善光寺参道
Photo by 掬茶 from Wikimedia Commons

長野支部で会員と宣教師は
よく卓球に興じていた

1980年当時の長野支部の礼拝堂。現在の長野支部は別の場所にある

このアーケードで宣教師と出会った

42年前にアラン長老から話しかけられた場所で

帰り道，善光寺近くの商店街で宣教師に声をかけられる。熱心な仏教徒の家庭で育ち，両親からは「家の近くにモルモン教会という教会がある。自転車に乗っている外国人がいるので，気をつけなさい。行ったら危ないよ」と言われていた。しかし，にこやかに立っているフレッド・アラン長老に何か引かれるものを感じ，吸い込まれるように話をしたという。日本に来てまだ２か月というアラン長老は，家族の写真や絵を入れたフリップチャートを繰りながら，「最初の示現」について短く紹介した。「自分とどういうかかわりがあるかな，というふうにして聞いたのを覚えています。たとえば，『知恵に不足している者があれば』と聞けば，ぼくも知恵が足りないかな。ジョセフが神様に祈ったと聞けば，ああ，うちの父親も宗教人で祈るので，祈ることって万国共通かなと。」ただ，天から神様とイエス・キリストが現れた話は，想像の世界のように思われた。宣教師から次の約束を求められて少しためらい，親のことも頭をよぎったが，数日後に会うことにした。親からは反対されつつも，キリストの教えを学び始め，集会にも活発に出席するようになった。

心の羅針盤に従う

和田少年にも，人がどうであれ自分の信念に従って生きるという気持ち，「反抗期」があったという。両親には，例えば東京の大学に行ったとしても，卒業後は長野に帰って来てほしいという気持ちがあった。ところが家を継ぐはずの長男は，東京どころか日本を飛び出してアメリカに渡ることを志し，親の思いとは反対の方向に進もうとしていた。

「日本人って意外とシャイでね。自分の心情をみんなの前にあからさまに伝えることはしないですよね。出る杭は打たれる，とかね。ちょっと違ったことをするというのはなかなか難しい。または，目立たないことにも美徳がある，というカルチャーじゃないですか。自分がみんなと同じようじゃなきゃいけない，同一化していきたい気持ちの中で，キリストの弟子になるということは，ちょっと異端児になるわけです。」

宣教師に会い，教会に行き始めた和田少年は，日本的な同調圧力や親の言うことに色々疑問を持つようになる。「皆がこうしているからこうしなさいっていうのは，もう，難しかったですね。なんで皆がやるからやらなきゃならないのか。自分で正しいと思ったことをやればいいんじゃないの，と何回も思ったことがあります。右にならえ，皆で同じことをすればいいという風潮の中で，イエス・キリストの言葉はそうじゃないですよね。自分で決める，自分に羅針盤がある。心の中に。」羅針盤は進むべき道を示している。あとは，それに従うだけだった。

ある寒い朝に

宣教師から福音を学び始めて３か月あまりたっていたが，「平行線を辿る生活」

和気藹々と活動していた和田少年，長野支部の会員と宣教師たち

宣教師のウィルクス長老と，学生服と上着を交換して撮った1枚。やがて自分が宣教師になることを主は示唆していたかもしれない，と後に和田長老は語る

長野支部の仲間たちと

和田少年の当時の学帽

1982年初夏，長野支部の6人の宣教師たちと和田少年（後列右）
手を挙げているのはガンソン長老（前列中央）

長野支部での食事会

が続いていた。宣教師は必ずバプテスマを受けるよう勧めるが，和田少年はいつも「まだ親が許してくれない」と断っていた。最初の宣教師から次の宣教師へと，同じことを続けていたある日，和田少年の良心がそっとささやいた。「貴志くん，あなた，親に聞いてないじゃない？ バプテスマを受けたいなんて。」自分はあまり誠実ではなかったと思った。尋ねるのが難しい状況もあったが，親に聞いても多分だめじゃないかなと諦め，そこに自分の不信仰があったことに気づいて，胸が痛んだ。

「ある寒い朝です。自分の部屋で目覚めたんですね。枕元に『モルモン経』※5が置いてあって，ブックマークはモロナイ書の10章3節から5節。そこだけはちゃんとマークしてあったんですよ。」宣教師から「これを試してください」と言われていたが，モルモン経を読んでもなかなかとっつきにくく，じっくりと読んではいなかった。

「あなたがたにとってこの記録を読むことが，神の知恵にかなうようであれば……心の中で深く考えてほしい。また，この記録を受けるとき，これが真実かどうかキリストの名によって永遠の父なる神に問うように，あなたがたに勧めたい。もしキリストを信じながら，誠心誠意問うならば，神はこれが真実であることを，聖霊の力によってあなたがたに明らかにしてくださる。」（モロナイ 10：3－4）

「当時の佐藤龍猪兄弟訳では，『神の知恵にかなうようであれば』は『神が許したもうならば』って書いてあったんです。――神がこの書物を読むことを許したもうならば――このモルモン書との出会い，宣教師との出会いは，神様が許してくれたのかな，っていうふうに自問したんですよ。そうしたら……想像できないくらいの感謝の気持ちで覆われたんです。」

御霊が和田少年を包み込んだ。

「この若い自分に，こんなすばらしい機会，宣教師と会う機会，福音と出会う機会をいただいたんだ。聖書も若いときに頂いて，真理をさらに学ぶことができたんだ」……圧倒される思いだった。

深く考えるほどに，祈るべきだと感じた。和田少年は生まれて初めて，布団の脇に行って，ジョセフ・スミスが森で祈ったことを思い出しながら，自分なりに声に出して祈った。「神様，天のお父様……」そう口にしたそのとき。「もう（それ以上）祈らなくても明白に，これは真実だ。これは自分がこれから進んでいく道だ，ってはっきり分かりました。もっと前に進みたいな，神様はわたしに道を示してくださっているんだな，という気持ちを強く感じましたね。」

御霊が証する

「じゃあ，宣教師のお友達を家に呼んだら？」和田少年が初めて証を得て間もない1981年2月末か3月初め，母親からの思いがけない提案で，宣教師6人を和田家へ招くこととなった。

8畳と6畳の狭いスペースは，分厚いコートの山と体の大きい宣教師たちでいっぱいになった。宣教師は，母親が用意した食べ物を何でもおいしそうに食べた。「それから父が帰ってきて，まず笑顔であいさつをして，……皆で賛美歌を歌おうじゃないかという話になったのを覚えています。『家庭の愛』を選んで歌ったら，父親が音楽のリズムに合わせて，手を叩きながら一緒に歌って，とっても和やかな雰囲気になったのを覚えています。」

その様子を見て一番驚いたのは，母の計子さんだった。あれほど反対していた父親が，真剣になって皆と一緒に歌っている。歌詞が心に沁み，母も父につられて，涙を流しながら歌った。一番の歌詞は皆，その場で覚えてしまった。忘れられない日となった。

現在，夫婦宣教師として神戸伝道部で奉仕しているアラン長老は言う。「（宣教

※5―現在のモルモン書。明治時代の文語訳を口語訳に改訂し，1957年に初版が出版された

1982年7月29日，長野支部にて。渡米直前の和田少年（右から2人目）

伝道から帰還直後，帰省した実家の前で両親と

ソルトレーク神殿のテンプルスクウェアで伝道中の和田長老。このころまでは長老宣教師が各国語で案内していた

MBAコース（経営学大学院）の学友たちと

師の）仕事は，ただそこに行って，最善を尽くして人々をキリストのもとに招き，聖霊の力によって教えることです。そして，あとは天の御父に委ねるのです。彼らを変える責任を負う必要はないのです。」

「初めてアラン長老と会ったときから，やっぱり宣教師というのは特別な何かを持っていると思いましたね」と和田長老も回顧する。「宣教師に燃えるような証をされると，ああすごいな，と感じる。ジーンと熱くなるものがあってね。自分が知っている19歳や20歳の人たちで，こんな人いないなと思いますよね。」

両親の和らいだ表情を見て，和田少年はその思いを強くした。「聖霊の力とか，宣教師が持っている力とか，そういうものだと思うんですけど，その彼らの力と信仰が集まれば，やっぱり雰囲気が違いますよね。異言の賜物もありますし，それを通して宣教師たちから感じたものは，言葉では説明できなかったけど，わたしにもそれが分かったので。親には，宣教師に会えばもっと理解してもらえると思いました。」

主の方法が示される

知る由もなかったが，母は息子の改宗に反対しつつも，留学を夢見る息子の気持ちを伸ばしてあげたいと思い，父親にも相談して，どうしたらいいものかと話し合っていた。一方で，和田少年のアメリカ留学の計画は，宣教師と会ううち，急速に具体的になっていく。両親は高校を卒業してからでもと考えていたが，和田少年は本能的にできるだけ早く留学したいと思っていた。学校の先生も，「貴志くんがやりたかったら，やってもいいんじゃないか」と後押してくれた。ユタ州の大学の先生の家にホームスティをする。その家の息子さんは日本で伝道したので，日本語を話せる。電話越しにホストファミリーと話し，親も安心することができた。和田少年が決意すると同時に両親の側でも，愛する息子に旅をさせる覚悟を固めたのだった。アメリカに送り出すにあたって，その一環という形で，両親からバプテスマの許可を得た。ビザ取得，高校に編入するタイミングなども，すべてイメージ通りに進んでいった。

「主はわたしに，行くすべを示してくれましたね。親は，アメリカに行ったら，もう日本に戻らない覚悟でやりなさいと。3日坊主はだめですよ，という心持ちで言われたので，日本を捨てた気持ちで行ったんですよ。困ったら日本に帰ればいいなんて思ってなかった。失敗は許されない，そういう緊張感の中にずっといたんですけど。まあ，後々その努力と経験が役立ちましたね。」

英語の壁と文化の壁

いざアメリカに行ったら，分からないことだらけだった。教科書で学ぶのと，実際に話す英語，聞く英語は違った。文化も違い，言語を勉強しただけでは言外の文脈が理解できない。「言葉が分かっているようで分かってない。分からなかったら分かるふりをする。言語を学ぶときに，そのような生き残り方をしてきました。」

それで，大失敗もした。「運転免許証は，アメリカでは16歳からもらえます。そのために，学校で運転免許を取れるクラスがあります。ペーパーの試験もあれば，実際に道路に行くクラスもあります。」ある日の路上教習で，先生が「目の前にBumpがある」と注意を促す。「Bumpの意味が分からなかったんです。それについて考えれば考えるほど，スピードが落ちるわけです。目の前が何かぼやけてきて，あ，スピードが落ちてる……と反射的にアクセルを踏んだら，目の前に，『そこでスピードを落としなさい』というサインの，道のでこぼこ（Bump）があってね。車の底をガッとやってしまったんです。そして前へ行こうとしたら，先生が助手席でブレーキを踏んでるわけ。もうさんざん怒られました。怒られても，何を怒られたか分からない。」自己嫌悪に陥った。「そういうことの繰り返しの中で，失敗を通して学ぶ。Bumpという言葉も学びましたしね。」

「外国語を勉強する，そのカルチャー

イエス・キリストに信仰をもって前に進むとき自分の弱さを強さに変えてくださる

1984年1月，ユタにて。伝道に出る和田長老（前列右）を激励する，日本で伝道した帰還宣教師たち

ブリガム・ヤング大学の卒業式にて

1994年，東京神殿で結婚する

結婚後の大学院時代

に入っていくということは，自分の人格をも否定するがごとく，すべてを壊して学ばなければならない。その気持ちの中ですごく不安定になる。だから，他の人たちが高校や中学からアメリカに行きたいと言っても，わたしは勧めるかな？ と思いますけどね。でも，わたしはそれをしたいと思って，主はその方法を示してくださった。」

人生を導くイエス・キリストの方法

「人がわたしのもとに来るときに，主は弱さを示す，というエテル書の言葉※6 がありますけど，なぜかな，と。

心から祈ることは神のもとに行くことです。聖文を勉強すること，戒めを守ること，バプテスマを決意すること，福音を伝えることもそうです。イエス様の教えられたことをするのが，イエス様のもとに行くことですよね。自分がもっと神に近づきたいと思ったときに，謙遜になる。謙遜になるのは，自ら謙遜になることもあれば，謙遜にさせられることもある。そのときに，神様にへりくだって，もっと学びたい気持ちになる。

そうするとそこに御霊が宿って，主の方法を示してくれる。自分には分からなかった才能や，神様からの指針に気づく。わたしは何回も何回も，こういうことを繰り返してきました。わたしたちがイエスに信仰をもって，もっと前に進むときに，自分の弱さを強さに変えてくださる。これは本当に主の方法だと，わたしは確信しています。」

高校からカレッジまで２年学んで伝道に出た。アメリカで伝道することで，英語が流暢になるだけでなく，英語でリーダーシップを取れるようになった。「主はそれをお許しになって，後々のわたしの人生の中で，それを一つの糧として備えてくださったのかなと思います。わたしたち人間はこの地上に来て，神様からの賜物を，一人一人違った才能をもらっているわけですよね。その才能は何であるかというのは，自分の心の奥底で気がついている。そしてそれが，自分の行く方向に正しいかなと尋ねたら，御霊を通して正しいと教えてくれる。英語を早く勉強したこと，海外に行ったこと，伝道に行ったこと，全部大変でしたよ，やっているときは。でも，後々，また大きな糧となってくる。それを繰り返していくうち確認していって，ああ，あのときやったことは正しかったんだ，ということの繰り返しだったと思います。」

無駄な経験は何一つない

伝道から帰還し，BYU で学んでいるときに，活動委員長という責任をもらった。「長と付くような役割にすごく緊張したんですよね。できるのかなと。アメリカの楽しい活動の意味も分からないし。」副委員長には，ヘザーという姉妹が召された。彼女は，アメリカの活動をよく知っているし，小さい時から学んだ楽しい家庭の夕べの活動も知っている。１年間，彼女の後について，彼女から学んだ。心強かったが，自分は何も分からず，ただにこにこしているだけ。自己嫌悪に陥ったこともあるが，楽しいこともあった。大勢の新1年生たちがグループ決めをするゲームでは，それぞれに動物の名前が割り当てられ，その鳴き真似をしながら同じグループを探す。「そんな，ほんとうに些細なことで大笑いしましたけどね。こんな楽しい活動があるんだな，と。」

卒業後は結婚をし，大学院で経営学を学んで，社会に出た。「後に，働いているときに，わたしは 7,000 人くらいの社員を採用して，教育する責任者だったんです。」採用を完了し，全社員が集まって親睦の班決めをするときに，和田兄弟はあのゲームを思い出して使った。20年後のことだ。「だから，若いときに学んだことが後になって甦ってくる。それも自分が全然考えていなかったときに。年を取るごとに，学んだこと，宣教師のときのことは，すべて無駄なく役に立ちました。」

その外資系企業は，日本に大規模なテーマパークをオープンしようとしていた。そのための人材を集め，教育すると

※６― 「もし人がわたしのもとに来るならば，わたしは彼らに各々の弱さを示そう。わたしは人を謙遜にするために，人に弱さを与える。……もし彼らがわたしの前にへりくだり，わたしを信じるならば，そのとき，わたしは彼らの弱さを強さに変えよう。」（エテル 12：27）

イエス・キリストの教えを生活に活かしたら可能性はもう，すばらしいですよね

7,000人のスタッフが勢揃いした集合写真

いうのは大事業だった。当初，アメリカの親会社はプロのスタッフとその家族を来日させて，日本人スタッフを訓練しようとしていた。しかし，その方法では莫大な費用がかかる。「じゃあ，和田さん，何ができる？」と聞かれた。「わたしもよく祈りました。あと，自分のスタッフにも，彼らの方法で祈ってくれと言いました。」

謙遜になって求めたとき，自身の留学体験を思い出す。留学して卒業した人たちが，どういうことを経験するかも分かっていた。グリーンカード（アメリカの就労ビザ）を得るのは容易ではないが，アメリカに留学した学生は卒業後1年間，アメリカで働けるビザが発行される。アメリカの大学を卒業する日本人留学生を現地で雇用し，テーマパークで1年間，実地研修してもらえばどうだろうか。「フロリダの役員に説明したんですよ。全部で120人近くトレーニングしたいと。ありとあらゆるテーマパークのポジションで。そうするとみんな，いい顔をしないんですよね。もう神様，助けてください，と。」

和田兄弟は，親会社の役員を説得し，まず20人を採用する。すると，彼らは英語が堪能かつ優秀で，テーマパークの運営を学ぶだけでなく，なんと現場の問題の改善方法まで提案したのだった。経営陣は乗り気になった。テーマパークで働きたい学生は多く，相次いで留学生を雇用していった。「そういう集団を120名，200名くらい用意して，並行して新卒も日本で採用していくと，もう十分にスキルのある人たちができる。」現地採用の留学生たちが日本での訓練の中心となり，7,000人以上のスタッフを揃えてオープンにこぎつけられたのだった。

「仕事でのヒント，こんな難しいことについての解決法ができたんだと思うと，神様に感謝しきれないですよね。」この会社は後年，北京にもテーマパークをオープンした。そのマネージャーも「わたしが考えた手法を，そのまま持って行ってやって，今でも重宝していると言われたので，神様に感謝ですよね。」

神が許したもうた機会

多くの青少年は，親から福音を学んでいるから，福音に出会うということについてあまり考えないかもしれない。当然のことのように，生活に福音があるかもしれない。「でも，なぜぼくは末日聖徒の家族で育ったんだろう。または，初めて教会のことを学ぶ人は，なぜ福音に出会ったんだろうか」そう問いかけてほしい。「そのときに，神様がこの機会を許してくださっている，ということに気が付くと，感謝の気持ちに満ち溢れる。神様の愛を感じる。すると，もっと神様に従いたくなる。その気持ちに応えたくなる。一人一人が心を開くことを通して，心が柔らかくなる，その経験をぜひ皆さんにしてほしいと思います。」そのプロセスを通して，「天のお父様がわたしたちを愛しているがゆえに，自分にとってとても大切な御子，独り子をこの世に送ってくださったという意味をよく理解できると思います。わたしたちは，イエス様が教えられたこと，模範で示してくださったこと，すべてから学ぶことができます。」

和田長老は約束する。「これを生活に活かしたら，どのような人格を持つことができるか考えたら……可能性はもう，すばらしいですよね。考えられないほどです。若い世代の皆さんには，イエス・キリストについて続けて勉強して，祈って，イエス・キリストの弟子になる決意をしていただけたらと思います。」そして大事なのは，「親が言ったからじゃなくて，自分が決断することですよね。若い世代も自分の意思で正しいことを選んで，学んだことをどうやって活かすことができるかと考えれば，また，どうやって神様が皆さんの生活に影響を与えていくかを思い起こせば，神様は，ありとあらゆる方法でみんなに答えを示してくれる，とわたしは確信しています。」◆

和田少年ストーリービデオシリーズ
教会公式Webで公開中！
jp.churchofjesuschrist.org

ASIA NORTH AREA (JAPANESE)